



2018 11/24(土) 【平成30年度】実践女子大学公開講座／日野市コミュニティ勉強会  
生活科学部 第4回

# 今、若者は“地域”に何を感じるのか —多世代をつなぐこれからの地域づくりのために—



進行：須賀 由紀子  
(実践女子大学  
生活科学部  
現代生活学科 教授)

本学が有する「知」を、地域の皆さまに提供している公開講座。現代生活学科が担当する今回は、日野市との共催で、「若者との協働による地域づくり」を考えました。本学学生がそれぞれの取り組み報告や提言を発表した後、他大学の学生や地域住民の方が参加してトークセッションが展開されました。

## プレゼンテーション

本学現代生活学科の学生が、自身の力でどのような地域活動を生み出したかを紹介。また、居心地よく過ごせる「居場所」を地域につくるための提言を行いました。

### ◆学生の地域活動が作り出した事例～地域の力とは～

#### 『二中ブランニング（二中地区アクションプラン）』

和田 泉穂（現代生活学科3年）

これは二中地区を散策（ブランニング）しながら地域の魅力を発見し、その活用方法をブランニングする取り組みです。これまでに何度もブランニングを行い、得られたものをもとに『二中地区ブランニングマップ』を市民の方と作成しました。またこの活動を、高校生と本学学生が街歩きなどを行いながらより良い街づくりを考える『高大連携サマーキャンプ』につなげました。そしてこのキャンプの成果を改めてブランニングに活用。皆で各地の坂をめぐって名前を付けるといった活動に、幅広い世代の方が参加してくださいました。



#### 『オクトーバーフェスト（カワセミハウス）』

足立 美樹（現代生活学科3年）

カワセミハウスは、自然の大切さを再発見できる環境情報センターと、多世代が集まる地区センターが融合した施設です。ここを拠点に活動を行う団体の紹介を行いながら、日野特産の TOYODA BEER を楽しんでいただく『オクトーバーフェスト』を2017年から開催しています。2回目となる今回は、本学のさまざまな学科の学生や地域の方々との協力しながらイベントをつくり上げました。後日の反省会では、多くの学生と良い関係をつくれた、日野ブランドの価値向上につながった、といった声を地域の方からいただき、この活動が地域をつなぐきっかけを生み出したとうれしく感じました。



#### 『新潟県十日町市布川地区との交流』

橋本 佳奈（現代生活学科4年）

私たちが所属するゼミでは、新潟県十日町市の布川地区でも集落活性化活動を行っています。交流の要となる活動は田植えで、本学専用の田んぼも貸していただいています。この取り組みを日野市のオクトーバーフェストで紹介したほか、地域の魅力を盛り込んだ布川紹介パンフレットも作成しました。布川は私たちにあって、自然や人とのつながり、本当のゆとりを感じる故郷のような場所です。今後は『布川豊田実践プロジェクト』として、布川と日野市豊田が本学学生と卒業生を通じてつながり合う取り組みを展開したいと考えています。



#### 『多世代交流カルタ（市内地区センターなど）』

杉山 佳子（現代生活学科3年）

多世代交流カルタは、自分と異なる世代を理解し、普段あまり関わることのない世代が交流するためのツールとして本学学生によりつくられたものです。『アートカルタ』『見立てカルタ』の2種類があります。これまでに日野市中央公民館のほか、日野台にここカフェ、東宮下みんなのひろばなどの催しで、このカルタを使った交流を行ってきました。活動を通じて、このツールにより高齢者と子ども、学生がつながり多世代交流や異世代理解が行える場が生み出されていると感じました。そしてそこが、幸せを感じられる場となっていることも実感しました。



### ◆地域の居場所を増やしていく提案

#### 『居場所の分析 研究発表』

政田 玲奈（現代生活学科3年）

居場所には「社会的」「個人的」の2つがあり、前者には「受容的居場所」「所属的場所」「承認的居場所」、後者には「内省的居場所」「解放的居場所」があります。私たちは日野市民を対象に「居場所と感じられる場所はどこか」の調査を行いました。その結果わかったのは、最も多かったのが「受容的居場所」で、さらに居場所の種類に偏りが生じていること、また、若者の地域への関心が低いことでした。地域に愛着感情を持ち、地域の今後を担い多世代の人たちと積極的に関わる若者が増えることが、今後の地域での居場所について考えていく上で重要だと思いました。



#### 『大学生とまちあるき』

伊東 那奈（現代生活学科3年）

学生が居場所だと感じ住み続けたい街を実現するため、『大学生とまちあるき』プランを提案します。これは、地域に密着している社会人や自治会の方、子どもたちの参加のもと私たち学生がまちあるきルートをつくり、それをもとに新たな学生にまちあるきをしてもらうことで、人とのつながりを持てる社会的居場所を生み出す取り組みです。まちあるき後は感じたことなどを共有し、学生目線の新たな居場所マップをつくります。日野の魅力を知って地域とつながる。そして主体的に関わることで日野市に居場所ができ、やがては故郷となる効果が見込まれます。



#### 『くらし工房（カワセミハウス）』

高橋 智聖（現代生活学科4年）

私は『くらし工房』という、地域の人々の居場所となる新しいコミュニティカフェを提案します。これは「地域の人や自然、生活文化に触れる」「大人と子どもが互いに知識を贈り合う関係を成立させる」「何度も帰ってきたいくなる」の3つの要素で成り立ちます。この取り組みを2017年からカワセミハウスでスタートさせ、落ち葉やドングリで自分を表現するものなど、さまざまな企画を行っています。今後は、新たなコミュニケーションツールの開発や、くらし工房がハブとなってさまざまなコミュニティを生み出していく仕組みづくりを行いたいと考えています。





# トークセッション

日野市を拠点とする他大学における地域活動について当事者から紹介していただいた後、学生たちと地域の方々が、地域づくりへの想いや姿勢について語り合いました。

## 他大学学生が行う地域活動の発表

### ■三沢中地区 中村 美希氏 (中央大学)

市内の落川交流センターで活動し、「食と防災」の要素を持ったイベントを月1回、季節に合わせたイベントを年4回実施しています。前者では、自然豊かな環境の中、参加者皆で同じものを食べることで共通の意識や話題が生まれ交流が実現しています。またこの時、防災の要素としてご飯を薪で炊き、災害時への備えとしています。こうした取り組みで、子育て世代や高齢者がつながる多世代交流の場が生み出されています。

### ■三中地区 須崎 貴寛氏 (明星大学)

市内の空き家を活用するプロジェクトの一環として2018年4月にスタートした、明星地区つながりの家『アムール』の運営に参加しています。空き家活用に向けた会議は、毎週水曜日に第二武蔵野台地区センターで開かれているお茶飲み会『二水会』のメンバーが中心となって進行されました。高齢化の激しい三中地区において、近在の明星大学の学生をはじめ子どもから大人まで多世代が交流できる場を生み出そうということでアムール発足に至りました。

## 『これからの居場所の可能性について』

学生という若い力を地域に活かす「戻りたくなる地域づくり」を進めるため、4つの視点から、地域活動に対する学生と大人の想いの共有を図りました。

### 1. 何が自分を地域に向かわせるか

中村：そこに人のつながりがある、そして自分を受け入れてくれる場所があるということが活動を行う大きな理由になっています。地域にはさまざまな世代、いろいろな活動をされている方がおり、多様な価値観に触れられる点にも魅力を感じました。



▲二中地区/伊東 那奈、高橋 智聖、田原 瑞穂氏

須崎：大きな挫折を経験し人生を考え直した時、自分の性格や個性とは何だろうと思いました。ボランティア活動に参加し関心のベクトルが他人に向かう中で、自分の人格を見つめ直すことができました。こうした経験から、地域は自分を成長させてくれる、自分らしくいられる場所だと感じています。

伊東：私たちは未熟で、地域に出ると時に指導をいただくことがあります。そんな時、日野市役所や市民の方が支えてくださることで立ち直り、活動をやり遂げられています。そうした経験から、人の温かさや居心地の良さを感じて地域活動に行きたいと思うようになって感じています。



▲三中地区/須崎 貴寛氏、今城 則子氏

### 2. 学生が参加したことによる変化

西見：落川交流センターでは活動に参加する人の立場はすべてフラットで、学生も「一緒に活動する仲間」として受け止めています。子育て世代にも参加してもらっていますが、若い人たちの行動力や発想力が私たちの活動を活気のあるものにしていただいていると感じます。

今城：アムールは明星大学に通じる大通りの近くにあり、学生の方々が折々顔を見せてくれます。利用者は「元気をもらえる」と、とても喜んでます。

田原：学生は私たちの地域活動に必要な存在。たくさんの可能性を秘め、若い世代ならではの発想力と考えを私たちに伝えてくれます。また、いつも一生懸命で大人が見習うべきところがたくさんあります。

### 3. 学生にとって、居場所や故郷とは?

中村：活動によって、地域には自分が関われる、居場所と思えるようにつながれる場所があるんだと気づかされました。地域の中に居場所を感じると、出身や住んでいる場所以外にも「ここが故郷」だという意識が生まれてくるのかなと思います。

須崎：居場所と故郷を考える際にキーワードとなるのは、「どれだけの安心感がそこで得られるか」だと思います。自分の場合、その安心感は何から生まれるのかを考えると、信頼できる人がその地域でどれだけ活動しているかを知ることだと思いました。

高橋：居場所や故郷は私にとって、愛があふれる、自分を受け入れてくれる、会いたい人がいる、本来の自分でいられるところだと感じています。私は群馬県出身ですが、日野市の地域活動に参加して、自分を必要とってくれる場所があることは本当に素敵なことだと実感しています。



▲三沢中地区/中村 美希氏、西見 幸雄氏

### 4. 学生と活動をするにあたり大切にしていること

西見：「一緒に活動する」姿勢です。「奉仕してもらう」という受け止め方では若い人は活動してくれません。仲間として温かく受け入れることが大切だと思っています。

今城：アムールに来てくれる学生、一人ひとりの想いをまず大切に受け止めて、それを皆で共有することから始めています。

田原：大人の考えを押し付けないことです。学生たちはそれぞれしっかりと自分の考えを持っていますので、存分に力を発揮できる雰囲気をつくり、より良い活動するために学生たちの考えを取り入れていくことが大切だと思います。



▲本学の地域づくりの取り組みを楽しく紹介するパネル展示も実施。

## トークセッションを終えて

須賀：これからの地域づくりを考える際、3つの視点がポイントとなります。まず、学生は日野市の地域おこし協力隊だということ。地域おこし協力隊は総務省が行っている、地域に若い人に入ってもらう事業で、地域活性化を実現するとともに参加者の約6割が定住を考える成果を生み出しています。2つ目は寛容性。若い人たちの拙い面を面白がりながら受けとめる姿勢です。3つ目は、学生を後期子ども世代と捉えるということ。学生は子どもにも大人にも近い世代なので、学生を中心に遊びを遊ぶ取り組みを行うことで自然に多世代交流が実現していきます。学生ができることはたくさんあります。それを受けとめる温かい大人がたくさんいることが、これからの街づくりに望まれるのではないかと思います。

### 《市長挨拶》大坪 冬彦 日野市長

学生の活動に脱帽するとともに、豊かな発想力に基づく行動から新たな示唆をいただいたと感じました。また、学生と地域住民がお互いに育て合う関係が築かれていることにも気づかされ、学生の日野市への愛情にも感銘を受けました。須賀先生から指摘していただいた、学生を受けとめる寛容性は、地域の中に十分に培われつつあると思います。「学生を後期子ども世代と捉える」ことを念頭に、これからの日野市の街づくりをしっかり進めていきたいと思っています。



## 参加者アンケートから（抜粋）

- 「自分からもっと地域に出ていけば受け入れてもらえるのかな」と感じ、その行動が故郷や居場所の獲得につながることに改めて気づかされました。  
(女性・20代・学外・日野市内)
- 学生や地域の方がどのように地域に関わっているか、またその想いを知ることができて良かった。「故郷」「居場所」がキーワードだと感じました。  
(男性・40代・学外・日野市内)
- 現代生活学科の、現場に実際に出ていくことからの学びの意義を深く感じました。学生の力、柔らかな発想力と感受性にも感動しました。  
(女性・50代・学外・日野市内)